

次に、参加者に、「声を出さずに、自分と合わせて3人の数字の合計が100になるようになってください」と呼びかけます。参加者は、工夫しながら相手を探しあてていきます。3人で100になったグループからその場に座ってもらい、まだ100にならない参加者の様子を見てもらいます。

ファシリテーターは、全員が3人1組になる過程を観察しながら、参加者の自発的な動きに注目します（全員が100にそろわずに時間切れになっても構いません）。

※自発的な動きとして、例えば次のような動きが予想されます。

- ①自分だけでなく、全体が100になるよう周囲に働きかける人がいる（傍観せずに他のグループを積極的に助ける人）。
- ②組み合わせが悪く、どうしても全員がそろわない場合でも、新たな知恵や行動を発する場合がある。

終了後、3人で100になったグループのいくつかに感想を聞き、その理由を出しあいます。そして、この動きからヒントを得て、ニート問題の解決に必要な動き、関わりは何かを具体的に話しあってもらいます。

ファシリテーターの問いかけ

- 「3人1組で100になることをやっていかがでしたか」
- 「他グループの動きを見て感じたことがありましたか」
- 「全員がスムーズに100になるには、どのような動きや動きが求められますか」
- 「この動きを現実のニート問題にあてはめると、このアクティビティから学んだことは何ですか」
- 「改めてニート問題の解決に必要な視点は何か、皆さんのお考えを聞かせてください」

●ふりかえり(10分)

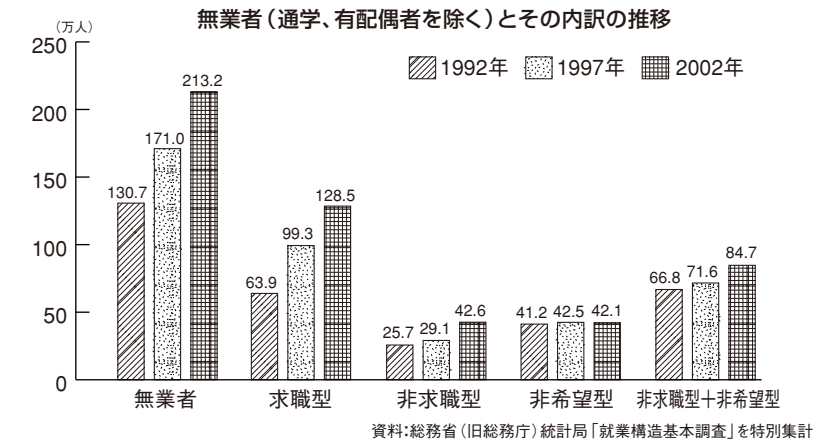
ニートは個人のライフスタイルの自由選択問題ではなく、社会的な構造上の問題であり、私たちの生き方と密接につながっていることへの認識を深めます。

また、その解決には当事者とあわせて、同じ社会の構成員である私たちが、その実情を理解し、受け容れようとする姿勢や行動が求められていることを共有します。

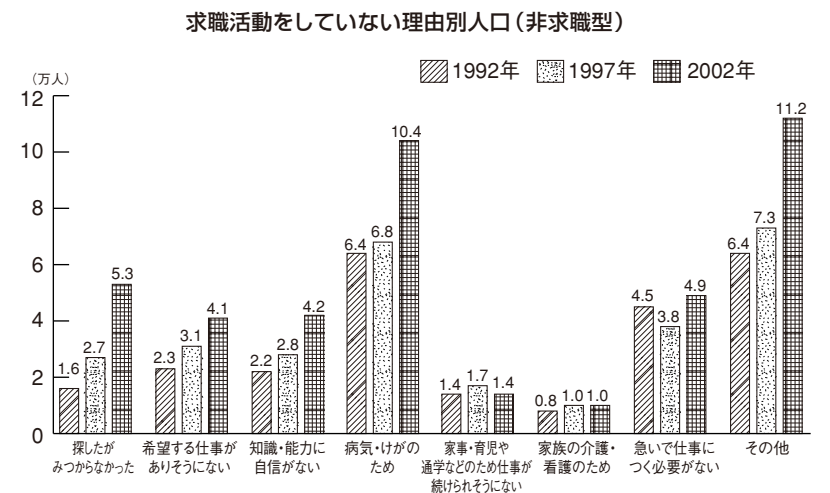
ニート問題

内閣府 求職活動をしていない若年無業者は約85万人
—「若年無業者に関する調査(中間報告)」2005年—

内閣府の調査によると、15歳から34歳の若年無業者(通学、有配偶者を除く)は、2002年時点で213万人に達し、1992年からの10年間で80万人増えました。このうち約129万人は仕事を探している「求職型」なのに対し、残りの約85万人は、就業を希望しながら仕事を探していない43万人の「非求職型」と、就業希望を表明していない42万人の「非希望型」です。この「非求職型」と「非希望型」の合計がいわゆる「ニート」と考えられ、1997年から5年間で13万人増えていきます。



「非求職型」のうち、求職活動をしていない理由としては「探したがみつからなかった」「希望する仕事がありそうにない」等の不況やミスマッチの影響、「知識・能力に自信がない」といった職業能力の不安のほか、「病気・けがのため」が大きく増えています。



厚生労働省 若年無業者は64万人で推移
—2006(平成18)年版 労働経済白書—

「ニート」に近い概念として、若年無業者を15～34歳に限定し、非労働力人口のうち家事も通学もしていない「その他」の者と定義して集計すると、2005年には64万人と前年と同水準となった。これを年齢階級別にみると、24歳以下の者は減少している一方で、25歳以上の者は増加しており、その構成比はより高い年齢階級にそのウェイトを移してきています。1993年からの推移をみると、2001年までは、40万人から49万人と増えてきており、2002年からは若年無業者が家事も通学もしていない既婚者・学生も加えて64万人で推移しています。

